『日本語学論集』第一三号　二〇一七年三月

程度副詞の構造と機能

井島　正博

はじめに

程度副詞に関しては、これまでにも多くの研究成果が公にされている。その多くは、程度副詞の個別的な問題を扱ったものであるが、工藤（一九八三・一〇）、渡辺（一九九〇・一）、仁田（二〇〇二・六）など、その全体的な体系を描こうとした研究も散見される。本稿は、それらの体系的な研究を批判的に検討し、また個別的な研究も参考にしながら、改めて程度副詞の体系を素描しようと試みるものである。

1　先行研究

程度副詞に関する先行研究は、およそ二〇〇本ほど見出すことができるが、その多くは特定の程度副詞に関する分析であり、その全体像に関して検討したものとしては、工藤（一九八三・一〇）、渡辺（一九九〇・一）、国立国語研究所（一九九一・三）、加藤（一九九六・三、九七・一〇）、林（一九九六・一二）、仁田（二〇〇二・六）、田和（二〇一一・三）、北原（二〇一三・三）など、非常に限られたものにしか過ぎない。ここでは、個々の程度副詞に関する分析も看過するわけではないが、程度副詞の全体像を見渡すにあたって考察の必要があると思われる渡辺（一九九〇・一）と仁田（二〇〇二・六）とを中心に検討を加えてみたい。

1・1　渡辺（一九九〇・一）による程度副詞の全体像

渡辺（一九九〇・一）では、〈発見／比較〉と〈評価／非評価〉という二つの基準によって、程度副詞を四つに類型化する。

そのうち〈発見／比較〉は、構文として、ヨリ節をとる（ことができる）かどうか、というものであり、形態的にも明確

で、程度副詞を分類するためには一見はっきりとした基準であるように思われる。

(1) a　私はいまとても悲しいのです。

a＊私はいまもっと悲しいのです。

b＊ひかりはこだまよりとても速い。

b　ひかりはこだまよりもっと速い。

もう一つの〈評価／非評価〉という基準は、工藤（一九八三・一〇）にも挙げられているものであるが、およそ話し手の主観的な判断に関わるものが〈評価〉であり、それに関わりのない客観的なものが〈非評価〉であるといったような、必ずしも明確なものではなく、後に検討したい。とりあえず、この二つの基準により、程度副詞は以下のような四つの類型に分けられることになる（図表一）。

	比較	計量	判断構造	評価	表現性	量
発見系 とても	×	○	発見	＋－	驚嘆	大
発見系 結構	×	○	望外発見	＋	脱懸念	（大）
比較系 多少	○	○	潜在比較	－＋	反期待	小
比較系 もっと	○	×	比較	＋－	吟味	大

評価系　評価系　非評価

図表一

そしてこの四つの類型に分けられる程度副詞には、以下のようなものが挙げられている。

とても類：はなはだ・すこぶる・たいへん・きわめて・ひじょうに・ずいぶん

結構類：なかなか・わりに・ばかに・やけに

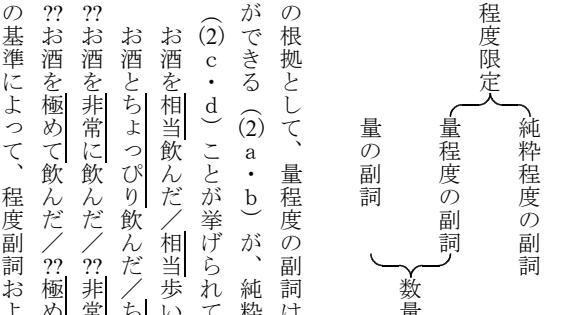
多少類：すこし・ちょっと・やや・いささか・かなり

もっと類：ずっと・よほど・いっそう・はるかに・いちだんと

ここで注目しておきたいのは、渡辺（一九九〇・一）は、〈発見／比較〉という基準はしばらく措いておくとして、〈評価／非評価〉を分類の基軸に据えたということである。

1・2　仁田（二〇〇二・六）による程度副詞の全体像

それに対して、仁田（二〇〇二・六）では、工藤（一九八三・一〇）、森山（一九八五・六）、佐野（一九九八・一二）などを承けて、〈程度／数量〉という基準を程度副詞および数量詞分類の中心に据える。すなわち、程度副詞および数量詞を以下のように分類している。すなわち、〈程度〉のみを表わす「純粋程度」の副詞、〈数量〉のみを表わす「量」の副詞に対して、「量程度」の副詞は程度副詞的な側面と数量詞的な側面の両者を兼ね備えた中間的なものであるというのである（図表二）。



二　表　図

その根拠として、量程度の副詞は直接動作述語を修飾することができる（2ａ・ｂ）が、純粋程度の副詞はそれができない（2ｃ・ｄ）ことが挙げられている。

(2) a　お酒を相当飲んだ／相当歩いた。
　b　お酒とちょっぴり飲んだ／ちょっぴり歩いた。
　c ??お酒を非常に飲んだ／??非常に歩いた。
　d ??お酒を極めて飲んだ／??極めて歩いた。

この基準によって、程度副詞および数量詞は次の三つの類型に分類される。

純粋程度の副詞：非常に、とても、大変（に）、すこぶる、たいそう、はなはだ（しく）、極めて、著しく、極端に、あまり（に）、至って、至極、ごくごく、ごく

いたく、おそろしく、いやに、（ど）えらく、すばらしく、ひどく、すごく、ものすごく、すさまじく、ばかに、馬鹿げて

とてつもなく、途方もなく、とんでもなく、猛烈に、やけに、無性に、法外に、めっぽう、むやみに、やたら（に／と）、むやみやたら（に／と）、目茶目茶（に）、異常に、異様に、飛び抜けて、ずば抜けて、ず抜けて、並外れて、際立って、とび（っ）かいり、目立って、例になく、いつになく

最も、一番、ずっと、よほど、遙かに、断然、より

もっと、さらに、一段と、一層

量程度の副詞：うんと、よほど、ずいぶん（と）、だいぶ、かなり、相当（に）、結構、わりあい、割（に／と）、比較的、多少、少々、少し、ちょっと、ちょっぴり、若干、ある程度、心持ち、やや、わずかに、いささか、いくらか、いくぶん

たいして、さほど、あまり、さして、そんなに、ちっとも、少しも、一向に、てんで、全然、まったく

量の副詞：たくさん、いっぱい、たっぷり（と）、どっさり（と）、ふんだんに

全部、全員、大部分、半分、少数、すべて、みんな、あらかた、おおかた、残らず

二つ、三個、四人、五本…

1・3　渡辺（一九九〇・一）と仁田（二〇〇二・六）との比較

渡辺（一九九〇・一）と仁田（二〇〇二・六）とは、まったく異なった基準をもとにした程度副詞の分類であるように思われる。すなわち〈発見／比較〉と〈評価／非評価〉という二つの基準を十字分類した渡辺（一九九〇・一）と、数量の程度を表わす表現に関して程度副詞＋数量詞が必要であるか、程度副詞だけでよいかを根拠にした仁田（二〇〇二・六）では、まったく異なった分類であるように思われる。そこで、渡辺（一九九〇・一）に挙げられた語と仁田（二〇〇二・六）に挙げられた語とに共通する二十三語（そもそも渡辺（一九九〇・一）には二十四語しか挙げられていない。残る一語は「なかなか」である）を、両者のどこに分類されているかを示したのが次の表である（図表三）。

	純粋程度の副詞	量程度の副詞
とても類	非常に・とても・大変（に）・すこぶる・はなはだ（しく）・極めて	ずいぶん（と）
結構　類	ばかに・やけに	結構・割（に／と）
多少　類		かなり・多少・少し・ちょっと・やや・いささか
もっと類	ずっと・よほど・遙かに・もっと・一段と・一層	

図表三

言うまでもなく完全に重なっているわけではないが、明らかにある偏りを示している。すなわち、太線で示したように、渡辺（一九九〇・一）のとても類ともっと類と仁田（二〇〇二・六）の純粋程度の副詞とが、また前者の結構類と多少類と後者の量程度の副詞とが対応する語が多い。これにはずれるのは「ばかに」「やけに」「ずいぶん（と）」の三語であるが、「ばかに」「やけに」は周辺的な程度副詞であり、「ずいぶん（と）」についてはまた後で考察したい。

このように考えると、渡辺（一九九〇・一）と仁田（二〇

〇二・六）との程度副詞の分類は、実は重なっているのではないかと考えられる。渡辺（一九九〇・一）がとても類ともっと類とに共通すると考えたのは〈非評価〉という意味特徴であり、結構類と多少類とに共通すると考えたのは〈評価〉という意味特徴であった。

ところで、「純粋程度」の副詞と「量程度」の副詞との区別は、構文上、数量表現の場合に、程度副詞＋数量詞となるか程度副詞だけでよいかという形の上の違いによってなされていた。しかるに、そのような形態上の違いの背後には、〈評価〉の有無という意味的な違いがあったのではないかと予想される。

2　程度副詞の分類基準

次に、そもそも程度副詞はどのような基準で分類するのが妥当であるかに関して検討を加えたい。

そもそも、渡辺（一九九〇・一）と仁田（二〇〇二・六）とでは、一見まったく異なった基準によって程度副詞を分類しているように見える。しかしながら両者は、本当にまったく異なった基準だったのだろうか。

2・1　〈評価／非評価〉

〈評価／非評価〉という概念は了解が難しい。

工藤（一九八三・一〇）では、程度副詞は「客観的で状態性の濃い」ものから「主観的で評価性の濃い」ものまでのスケール上に位置付けられ、その「主観的で評価性の濃い」ものの端は、「さいわい」「あいにく」のような「多くの場合に文頭（句頭）に位置して、後続のことがら内容全体に対する真偽や予想との異同といった話し手の評価・コメントを表わす」評価副詞である、と論じる。

評価性←……→程度性
［コトに対する評価副詞］―［サマに対する評価］―［サマについての程度副詞］

渡辺（一九九〇・一）では、工藤（一九八三・一〇）を承けて、〈評価／非評価〉という対概念を用いて、〈比較／計量〉と十字分類を行っている。しかるに、ここで挙げられている〝評価〟と工藤（一九八三・一〇）の言う〝評価〟とには、ズレがないかどうか考えてみたい。

渡辺（一九九〇・一）で最初に〝評価〟という術語が用いられるのは以下のような箇所である。

(3) a ＊甲社のガードマンは多少頼もしい。
　b　甲社のガードマンは多少頼りない。

(4)　a　彼は多少なまいきだ。
　b＊彼は多少すなおだ。

以上のような例文をもとにして、渡辺（一九九〇・一）は考察の中で以下のように述べる。

「多少」が本当の計量構文で用いられる時、A（引用者注:述語）の位置には、話者によってマイナス評価の与えられたものが最もよくなじみ、少なくともプラス評価の与えられた語はAの位置になじまない、と記述することが出来ると思われる。

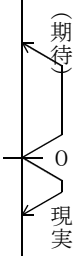
このように、〝評価〟はプラス／マイナスの判断のどちらかに偏ると論じている。しかるに、工藤（一九八三・一〇）の〝評価〟は、プラス／マイナスの偏りを必ずしも含むものではなさそうである。ここで渡辺（一九九〇・一）の程度副詞の分類を振り返れば、「ばかに」「やけに」を「結構」類（すなわち評価系）に入れ、「ずいぶん」を「とても」類（すなわち非評価系）に入れた理由に思い当たる。「ばかに」「やけに」はプラス評価の場合にしか用いにくく、「ずいぶん」はプラス／マイナスいずれの評価の場合にも用いることができる。そのことから、前者が評価系に分類され、後者が非評価系に分類されたと考えられる。しかしここでは、プラス／マイナスという〝評価〟の高低が問題にされており、工藤（一九八三・一〇）の言う「後続のことがら内容全体に対する真偽や予想との異同」という意味での〝評価〟とは異なっているように思われる。

さて、渡辺（一九九〇・一）では、それに続いてさらに考察を進める中に以下のような一節がある。

…青年であるからには、当然「すなお」であってほしい、といった期待が、一般的常識としてわれ〳〵にあるもののようなのである。そういうプラス期待を基準とした場合、その基準に及ばない、という表現が「多少」の役割である。その意味で「多少」は「反期待」の表現である。

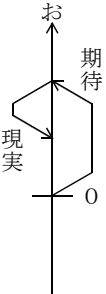
すなわち、プラス／マイナスの〝評価〟の背後には、話し手あるいは世間一般が持っている〈期待〉があり、それを満たせばプラスに〝評価〟され、それが満たされなければマイナスに〝評価〟されると論じられているようである。であるとすれば、〝評価〟よりも〈期待〉の方がより根本的な概念ということになりそうである。

さてここで、(4)a「彼は多少なまいきだ」の意味について、もう少し立ち入って考えたい。「すなお」と「なまいき」との境界となる基準を0とすると、「青年はすなおであってほしい」という期待はプラス側にあるとして、「彼」の現実のありさまは①マイナス側にあるのか、②期待までは及ばないものの、やはりプラス側ではあるのか（図表四）。



合場の①

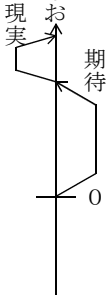
四合表場図



の②

渡辺（一九九〇・一）の説明は②を支持しているように思われるが、「彼はなまいきだ」という文の〈なまいきさ〉の程度が小であることを表わしているとすると、①の場合も不可能ではなさそうに思われる。

それはそれとして、(4)b「＊彼は多少すなおだ」はなぜ不自然なのだろうか。これは、今の②の解釈を援用すれば、青年に期待される〈すなおさ〉以上に「すなお」であることを意味することになり、その点が「多少」の意味と齟齬するためであろう。



五表図

いずれにせよ、〈期待〉はプラス／マイナスが本質なのではなく、現実が〈期待〉に一致するか不一致であるかが根本であると考えられる。ただ、程度を問題にする以上、不一致でなければならず、そこに程度の高低が生ずるのである。そしてその〈期待〉と現実との不一致とその程度を合わせたものが〈評価〉であると考えられる。

とはいうものの、〈評価／非評価〉の表現を区別することは理論的にも難しく、統語的にどのような基準がたてられるかに関しても、あまり明示的には示されていない。ちなみに、林（一九九六・一二）では、現在の話し手に関する事態には〝評価〟表現（ここでは「やけに」）は用いにくい（5）c）が、話し手でも過去の事態（5）c'）、あるいは三人称の現在の事態（6）c）には用いられる。それに対して、〝非評価〟表現（ここでは「すごく」）はいずれの場合も自然であるという。

(5) a　僕は困っている。
　 b　僕はすごく困っている。
　 c＊僕はやけに困っている。
　 c'　あの時の僕はやけに困っていた。

(6) a　彼は困っている。
　 b　彼はすごく困っている。
　 c　彼はやけに困っている。

また、田和（二〇一一・三）では、客観的な程度が求めら

れている場面で、「自分視点に基づくことがら評価」すなわち〝評価〟表現（「結構」「なかなか」）を用いると、不自然あるいは「少し失礼な印象を与える」表現になるという。

(7) a　今日は、〔結構／なかなか〕暑い。
　b ?息子さん、〔結構／なかなか〕大きくなりましたね。
　b' cf息子さん、随分大きくなりましたね。

〈評価／非評価〉を区別する統語的なテストについては、複数の可能なテストを比較検討してみる必要があると思われるが、他にどのようなテストが考えられるかに関しては保留しておきたい。とりあえず、話し手の発話時における〈期待〉をもとにした判断を表わすものが〈評価〉、非時間的で間主観的な基準をもとにした判断を表わすものが〈非評価〉と考えておきたい。

また次に見る〈純粋程度／量程度〉も、〈評価〉と密接に関わっているのではないかと考えられる。

2・2　〈純粋程度／量程度〉

先にも見たように、仁田（二〇〇二・六）では、程度副詞だけで数量も表わすことができるものを「量程度」の副詞、程度副詞だけでは数量を表わすことができないものを「純粋程度」の副詞と呼んで区別した。

(8) a　お酒を相当飲んだ／相当歩いた。（＝(2) a）
　b　お酒をちょっぴり飲んだ／ちょっぴり歩いた。（＝(2) b）
　c ??お酒を非常に飲んだ／??非常に歩いた。（＝(2) c）
　d ??お酒を極めて飲んだ／??極めて歩いた。（＝(2) d）

ここで先の程度副詞と数量詞との次元の違いを念頭に、(8) bの「ちょっぴり」はむしろ原則として「量」の副詞に入る可能性が高いと思われるので除けば、(8) a・c・dはいずれも数量詞たとえば「たくさん」を補うことができる。

(8) a'　お酒を相当たくさん飲んだ／相当たくさん歩いた。
　c'　お酒を非常にたくさん飲んだ／非常にたくさん歩いた。
　d'　お酒を極めてたくさん飲んだ／極めてたくさん歩いた。

ところで一般的に、程度を含む述語は、およそ[程度[状態[（動作）]]]といった構造をなしているものと思われる。

(9) a　この花は美しい。　[φ[状態[φ]]]
　b　この花はとても美しい。　[程度[状態[φ]]]
　c　花が美しく咲いた。　[φ[状態[動作]]]
　d　花がとても美しく咲いた。[程度[状態[動作]]]

数量詞も同じような振舞いをすることから、数量も[程度[数量[（動作）]]]といった構造をとるものと思われる。

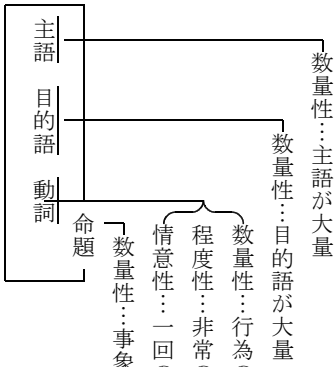
(10) a　咲いている花が多い。　[φ[数量[φ]]]
　b　咲いている花がとても多い。　[程度[数量[φ]]]

c　花が多く咲いている。　［φ［数量［動作］］］
d　花がとても多く咲いている。　［程度［数量［動作］］］

このように数量詞は状態の一種であると考えられることからすると、程度と数量とは次元を異にすることになる。

この問題に関しては、井島（二〇〇八・三）で、副助詞ホドを論じる中で検討したことがある。井本（一九九九・一〇）では、ホド句（ホドで結ばれた連用修飾句）が文中のどの部分を修飾するか、どのような修飾のしかたであるか（数量か、程度か、情意か）によって、〈目的語が大量〉〈主語が大量〉〈事象回数が大量〉〈行為の量が大量〉〈非常の程度〉〈一回の強いウゴキ〉の六類に分類している（図表六）。

(11)
a　お腹を壊すほどアイスクリームを食べた。　目的語が大量
b　庭を埋め尽くすほど花が咲いた。　主語が大量
c　背中が赤くなるほど次郎を叩いた。　事象回数が大量
d　病気になるほど働いた。　行為の量が大量
e　見違えるほど痩せた。　非常の程度
f　血がにじむほど噛んだ。　一回の強いウゴキ



六　図

井本（一九九九・一〇）では、ホド句そのものが〈大量〉〈非常の程度〉〈一回の強いウゴキ〉などを表わしているという議論であったが、ホド句の後に「たくさん」「ひどく」「強く」などを補うことが可能である。

(12)
a　お腹を壊すほどたくさんアイスクリームを食べた。
b　庭を埋め尽くすほどたくさん花が咲いた。
c　背中が赤くなるほどたくさん次郎を叩いた。
d　病気になるほどたくさん働いた。
e　見違えるほどひどく痩せた。
f　血がにじむほど強く噛んだ。

このことは、ホド句は、単に〈程度〉を表わすのみであって、数量詞ないし状態述語がない場合には特定の意味で解釈することになると考えればよい。すなわち、数量詞ないし状

態述語があればそれに関する〈程度〉を表わすが、それらがない場合には、対象や動作、事態の数量や、動作の強度の〈程度〉と解釈されると考えられる考えられる。

このホド句の議論は、そのまま〝量程度〟の副詞の議論に適用することができる。たとえば、程度副詞「随分」もホド句と同様に、数量詞ないし状態述語なしに用いることができる。

(13) a　随分アイスクリームを食べた。
　　b　随分花が咲いた。
　　c　随分次郎を叩いた。
　　d　随分働いた。
　　e　随分痩せた。
　　f　随分噛んだ。

ここで、何らかの数量を修飾する(13)a～dには「たくさん」、そうでない(13)e・fには「ひどく」「強く」を「随分」の後に補ってみても、文の自然さはそこなわれない。ただし、(13)eの類は、〈非常の程度〉と呼ばれているように、そこで用いられている動詞「痩せる」「太る」「疲れる」そのものが何らかのスケールを背景に持つ状態概念を含んでおり、あえて形容詞や副詞のような状態述語を補う必要は必ずしもない。

(14) a　随分たくさんアイスクリームを食べた。
　　b　随分たくさん花が咲いた。
　　c　随分たくさん次郎を叩いた。
　　d　随分たくさん働いた。
　　e　随分ひどく痩せた。
　　f　随分強く噛んだ。

すなわち、程度副詞は、何らかのスケールを背景に持つ状態概念を修飾することを本性とするはずである。何らかのスケールを背景に持つ状態概念という点では、数量詞もそこに含めることができると考えられる。

以上のことから、逆に程度副詞に修飾されたある種の状態述語は省略可能である、ということがわかる。しかるに、程度副詞によって修飾されうる状態概念には様々なものがあるはずである。それが、省略可能なものは、およそ対象や動作、事態の数量や、動作の強度に限られるということは何を意味しているのだろうか。言い換えれば、(14)a～fが(15)a～fのような意味（［　］で囲んで意味を表わす）にならないのはなぜなのだろうか。

(15) a　［随分おいしくアイスクリームを食べた］
　　b　［随分美しく花が咲いた］
　　c　［随分上手に次郎（の肩）を叩いた］
　　d　［随分楽しく働いた］
　　e　［随分綺麗に痩せた］
　　f　［随分優しく噛んだ］

もしこのように様々な解釈の可能性が開かれていたら、一体どのような意味であるのか決定することは不可能、少なく

とも非常に困難なことになるだろう。そうならないためには、常に状態述語を補うようにするか、状態述語がない場合には特定のステレオタイプ的な意味で解釈するようにすればよい。そのうち後者のスレテオタイプ的な意味が、対象や動作、事態の数量や、動作の強度であると考えられる（新グライス派の議論では「I推意」と呼ばれている）。

以上のように、「量程度」の副詞は数量詞があってもよいが、なくてもステレオタイプとして数量の意味が補われると考えられるわけであるが、他方で「純粋程度」の副詞は数量詞（ないし状態述語）がなければ不自然である。このような「量程度」の副詞と「純粋程度」の副詞との違いが説明されなければ、「量程度」の副詞が数量詞がなくても自然であることが説明されたことにはならない。

とはいうものの、この問題の解決の糸口はすでに工藤（一九八三・一〇）などにすでに指摘されているように思われる。すなわち、程度副詞と評価副詞（叙法副詞のうち、期待との一致・不一致などを表わす副詞）との連続性を考えるならば、「大変」などのような「純粋程度」の副詞と、「思いの外」「案外」などのような評価副詞との中間に、「随分」のようないわゆる「量程度」の副詞が位置付けられるように思われる。実際、「量程度」の副詞も評価副詞も、副詞だけでも、数量詞を伴っても、いずれでも自然に用いることができる（16b・c）。

(16)
a ??ショートケーキを大変食べた。
a' ショートケーキを大変たくさん食べた。
b ショートケーキを随分（たくさん）食べた。
c ショートケーキを思いの外（たくさん）食べた。

すなわち、「大変」のような「純粋程度」の副詞と、「随分」のような「量程度」の副詞とは、〈高程度〉といった程度のスケール上の意味が共通している一方、「随分」のような「量程度」の副詞と、「思いの外」のような評価副詞とは、期待と大きくかけ離れている、すなわち〈意外〉であるといった意味が共通していると考えられるのである。先に見たように、〈(高)程度〉と〈数量〉とが次元を異にしているように、〈(高)程度〉と〈意外〉とも次元が異なっていると考えられる（〈意外〉は広義のモダリティレベルと言ってもよいだろう）。そうすると、「純粋程度」の副詞は常に数量を含む状態概念の〈程度〉を表わすので、数量詞ないし状態述語が不可欠であるのに対し、「量程度」の副詞は〈程度〉に重点がある場合には数量詞ないし状態述語が共起するが、〈意外〉に重点がある場合には数量詞ないし状態述語は出現しないというように考えられる。ただ、その場合でもどのような意味で〈意外〉であるのかに関して、数量的な意味解釈（ステレオタイプ的意味、ないしI推意）が語用論的に要請されるのであると考えられる。

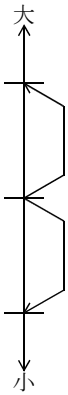
3　間主観基準／期待基準／特定基準（／高低基準）

以下では、これまでの議論を踏まえて、程度副詞を体系化する試みにとりかかることにしたい。これまで〈評価／非評価〉、（〈発見／比較〉）、〈純粋程度／量程度〉といったさまざまな意味特徴に関して検討を加えてきた。そのうち、〈評価／非評価〉の背後には、話し手が発話時に持っている期待を基準にしているのか、非時間的で間主観的な基準をもとにしているのかの違いが見出された。また、〈発見／比較〉は～ヨリ句が共起するかどうかという、一見客観的な区別がありそうではあるが、後でも若干見るように、いわゆる発見系の程度副詞にも～ヨリ句と共起する例も見られ、いわゆる比較系の程度副詞はむしろ具体的な特定の基準をもとにしているために～ヨリ句を必要とすると考えるべきなのではなかろうか。さらに、〈純粋程度／量程度〉が示す、程度副詞と数量詞がともに必要であるか、程度副詞だけでよいかという、形態的な違いの背後には、工藤（一九八三・一〇）が論じたような、程度副詞と評価副詞との連続性、言い換えれば先に見た、間主観的な基準をとるか、期待を基準にとるかという違いの反映であると考えられる。

このように、どうやら程度副詞を分類するには、程度を計測する基準としてどのようなものをとっているか、に注目することが最も程度副詞の本質に忠実なやり方であるように思われる。そこで程度副詞を類型化するために、どのような基準を立てる必要があるかについて検討を加えたい。

まず、何らかのスケールを背後に持つ状態ないし数量には、程度〈高〉と判断するか程度〈低〉と判断するかに関して、間主観的な基準が存在するものと思われる。これを「間主観基準」と呼ぶことにしたい。まだこの段階では、たとえば〈大きさ〉を表わすのに、「大きい」を使うか「小さい」を使うかが問題にされており、程度副詞は用いられない。動物の〈大きさ〉を問題にする場合、間主観基準は恐らく人間に置かれ、それより大きい動物（たとえば象）とそれより小さい動物（たとえばネズミ）に分けられる。

(17)　a　象は大きい。
　　b　ネズミは小さい。



間主観基準　　七　表　図

次に、「大きい」側でも「小さい」側でも標準的な〈大きさ〉や〈小ささ〉といったものが想定されていると考えられ、これを「高低基準」と呼ぶことにしたい。この高低基準を越えるものは程度〈高〉と判断され、高低基準に達しないもの

は程度〈低〉と判断される。そしてこの程度の高低によって程度副詞が使い分けられると考えられる。

(18) a　この象はとても大きい。
　b　あの象はそれほど大きくない。

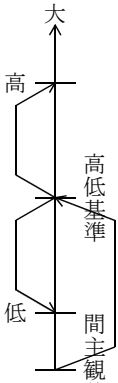


表　八

図

しかるに、常に程度は間主観基準によって計られているわけではなく、話し手がその場であるいは前もってこれくらいだろうと予想していた程度を基準とするような場合も考えられる。これを「期待基準」と呼ぶことにしたい。そしてこの期待基準に対しても、期待と現実との間に高低基準が適用され、期待を大きく上回るか、あまり上回ることがないかによって程度副詞を使い分ける。

(19) a　このケーキは結構おいしい。
　b　このケーキは多少はおいしい。

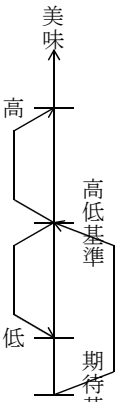


表　九

図

さらに、期待と異なることを表わす「案外」「思いの外」のような評価副詞は、本来は程度を表わすものではないが、臨時に程度の大きさを含意して用いられる。また、期待を比較の基準として「思ったより」「予想より」なども使うことができる。

(20) a　このケーキは案外おいしい。
　b　このケーキは思ったよりおいしい。

また、具体的な特定の対象を比較の基準として程度の高低を計る場合がある。これを「特定基準」と呼ぶことにする。具体的な特定の対象は、文中あるいは文脈中に示される必要があるが、ここに〜ヨリ句が用いられる。

(21) a　太郎は次郎より背が高い。
　b　次郎は太郎より背が低い。

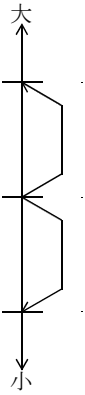
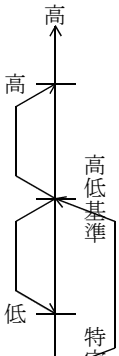


表　十

図

ここにもさらに高低基準が適用されると、特定基準との間の程度差が大きいか小さいかによって程度副詞が使い分けられる。

(22) a　太郎は次郎よりずっと背が高い。
　b　太郎は次郎よりちょっとだけ背が高い。



一十表図

ちなみに、～ヨリ句を伴う程度副詞の代表として、しばしば「もっと」が採り上げられるが、一文中に明示的に～ヨリ句が用いられている場合には、「もっと」も「ずっと」もφ（程度副詞なし）も自然であるが、文脈によって特定基準が示され、一文中に明示的に～ヨリ句がない場合には、比較の表現としては、φは不自然で、「ずっと」も許容度が落ちる。

(23) a　山田は田中より〔もっと／ずっと／φ〕金持ちだ。
　　b　田中は金持ちだ。しかし山田は〔もっと／？ずっと／＊φ〕金持ちだ。

このことは、「もっと」は特定基準が明示されなくても、「もっと＋形容詞・形容動詞」でいわば英語の比較級に相当するような働きとなり、それが用いられた文は、潜在的に特定基準を要求する文となると考えられる。すなわち、「もっと」は特定基準を上回ることを表わすのみで、その程度が〈高〉であることを必ずしも意味するものではない。それに対して、「ずっと」は程度が〈高〉であることを専門に表わす表現であると考えられる。

また、～ヨリ句をとることができるかどうかは、一見程度副詞を分類する客観的な基準のように思われることについて触れておきたい。先に(20)bで期待基準を明示的に「思ったより」「予想より」のように示すことができることを見た。実例を検索してみると、確かに特定基準をとるもの以外の程度副詞が～ヨリ句をとる例は少ないが、以下のように見出されないわけではない。奇しくも(24)a、cには「普通の」という表現が共通しており、間主観基準を～ヨリ句で明示しているものと判断できる。

(24) a　在木カネと充田タカは血縁関係はないが、タカはいつも普通の闇屋よりもずいぶん安く商品を売ってくれていたと云う。
　　井伏鱒二『黒い雨』
　　b　「さっきよりずいぶん楽になったようです」と僕は言った。「今は何時ですか？」
　　村上春樹『世界の終りとハードボイルド・ワンダーランド』
　　c　実際父は大丈夫らしかった。家（いえ）の中を自由に往来して、息も切れなければ、眩暈も感じなかった。ただ顔色だけは普通の人よりも大変悪かったが、これは又今始まった症状でもないので、私達は格別それを気に留めなかった。
　　夏目漱石『こころ』

以上のように、比較する基準をもとにして程度副詞を分類するのが、程度副詞の本質に沿った分類であると思われる。すなわち、間主観基準・期待基準・特定基準の三者である。

間主観基準の副詞と期待基準の副詞は、およそ渡辺（一九九〇・一）の非評価系・評価系の違い、あるいは仁田（二〇〇二・六）の「純粋程度」の副詞・「量程度」の副詞の違いに相当し、特定基準の副詞は渡辺（一九九〇・一）の比較系に対応するものである。

ここで、副詞を比較基準によって三つに類型化したが、渡辺（一九九〇・一）では、〈発見系／比較系〉、〈評価系／非評価系〉という二組の意味特徴を十字分類して、「とても」類（発見系×非評価系）・「結構」類（発見系×評価系）・「多少」類（比較系×評価系）・「もっと」類（比較系×非評価系）という四つの類型に分類していた。三つと四つという類型の数の相違をどのように考えるべきだろうか。

そこで注目したいのが、渡辺（一九九〇・一）が類型の特徴を示した中で、「量」という項目があり、その内容が「とても」類・「結構」類・「もっと」類は〈大〉となっているのに対して、「多少」類は〈小〉となっていることである。すなわち、「量」が〈大〉である「とても」類・「結構」類・「もっと」類に対応する、「量」が〈小〉である程度副詞は「多少」類が一手に引き受けていると考えられる。

「とても」／「多少」

(25) a　この週末はとてもリラックスできた。

b　この週末は多少リラックスできた。

「結構」／「多少」

(26) a　約束の時間に結構遅れてしまった。

b　約束の時間に多少遅れてしまった。

「もっと」／「多少」

(27) a　田中は佐藤よりもっと背が高い。

b　田中は佐藤より多少背が高い。

このことは、やはり渡辺（一九九〇・一）の表の中で、「多少」類だけが比較にも計量にも用いられる、というところにも表われている。「量」が〈大〉の場合には形1態的にもはっきり区別するが、「量」が〈小〉の場合にはそれらが中和してしまうということは、自然言語にはありそうなことではないだろうか。そう考えると、意味類型としては渡辺（一九九〇・一）の場合も、「とても」類・「結構」類・「もっと」類の三類型に収斂されるのではないだろうか。

そして最後に、この三つの類型を改めて、「間主観基準」の程度副詞、「期待基準」の程度副詞、「特定基準」の程度副詞と呼ぶことにしたい。

おわりに

程度副詞の体系についてまとめてみたいと考えたのは、はるか二十年ほど前のことであった。とはいうものの、骨格となる議論をうまく組みたてることができず、長らく放棄していたが、もはやあまり時間的な余裕もなくなってきた。そこ

でここでは、程度表現の根本に見出される基準というものを骨格として、とりあえずの全体像を描いてみた。個々の程度副詞に関する議論も組み込んで体系化を図りたかったが、それはまた次の機会に譲ることにしたい。論文リストには個々の程度副詞に関するものも合わせて挙げる。

○資料:『新潮文庫の一〇〇冊』

○参考文献

山田　孝雄（一九〇八・九）『日本文法論』宝文館

山田　孝雄（一九三六・五）『日本文法学概論』宝文館

橋本　進吉（一九四八・一）『国語法研究』岩波書店

時枝　誠記（一九五〇・九）『日本文法　口語篇』岩波書店

森重　敏（一九五四・二）「群数および程度量としての副詞」『国語国文』第二十三巻第二号

越智　聡（一九五六・一一）「『ばかに』をばかにするな―体言・副詞・形容動詞の悲しみ―」『国語研究』第二十三号（愛媛国語研究会）

森重　敏（一九五八・一）「程度量副詞の設定」『国語国文』第二十七巻第一号

橋本　進吉（一九五九・一〇）『国文法体系論』岩波書店

鈴木　一彦（一九六四・一）「副詞」『講座現代語6　口語文法の問題点』明治書院

中沢　政雄（一九六六・六）「現代国語学（2）『とてもきれいだ』―陳述の副詞の退化―」『国語教育科学』第六巻第六号

川端　善明（一九六七・一〇）「数・量の副詞―時空副詞との関連」『国語国文』第三十六巻第十号 pp.1-27

久米　稔（一九六八・＊）「『頻度に関する副詞』の意味の測定に関する試み」『フィロソフィア』第五十四号（上智大学）

久米　稔（一九六九・九）「頻度をあらわす副詞の意味の測定」『早稲田大学語学教育研究所紀要』第七号 pp117-139

Greenbaum,S.（一九六九・＊）"Studies in English Adverbial Usage" London, Longman（郡司利男・鈴木英一　監訳『英語副詞の用法』研究社）

織田　揮準（一九七〇・九）「日本語の程度量表現用語に関する研究」『教育心理学研究』第十八巻第三号

原　栄一（一九七一・二）「程度副詞おほきに小考」『金沢大学教養部論集　人文科学編』第八号

渡辺　実（一九七一・九）『国語構文論』塙書房

久野　暲（一九七三・六）『日本文法研究』大修館書店

吉田　則夫（一九七三・八）「副詞研究文献目録稿」『広島大学方言研究会会報』第二十一号

工藤　浩（一九七四・八）「〈ことばの研究室〉『たった』は副詞か連体詞か」『言語生活』第二百七十五号

奥津敬一郎（一九七五・三）「程度の形式副詞」『都大論究』第十二号（東京都立大学）

丹保　健一（一九七五・三）「『程度副詞』＋『動詞』の意義記述―『もっと』＋『動詞』を中心に―」『国語学研究』第十四号 pp.62-69（東北大学）
若山　明子（一九七六・一一）「『すこしも』の意味・用法について」『武庫川国文』第十号
柄沢　衛（一九七七・三）「『全然』の用法とその変遷―明治二、三十年代の四迷の作品を中心として―」『解釈』第二十三巻第三号 pp.38-43
森田　良行（一九七七・一〇）『基礎日本語１』角川書店
松井　栄一（一九七七・一一）「近代国語文における程度副詞の消長」『松村明教授還暦記念　国語学と国語史』明治書院 pp.737-758
茂田　恵（一九七九・九）「大阪府豊能郡能勢町地黄方言の程度副詞語彙―『数量程度をあらわすもの』を中心にして―」『国文学攷』第八十三号（広島大学）
丹保　健一（一九七九・九）「程度副詞の体言修飾について―『もっと右を通った』を中心に―」『文芸研究』第九十二号（東北大学）
花井　裕（一九八〇・一〇）「概略表現の程度副詞―『ほとんど』などについて―」『日本語教育』第四十二号 pp.73-85
小矢野哲夫（一九八一・二）「言葉の意味の記述をめぐって―『飛切り』『底抜けに』『滅法』『途轍もなく』を例として―」『日本語・日本文化』第十号 pp.23-44（大阪外国語大学）
丹保　健一（一九八一・一〇）「程度副詞と文末表現―『ひじょうに』を中心に―」『金沢大学語学・文学研究』第十一号
石神　照雄（一九八一・一一）「比較表現から程度性副詞へ」『島田勇雄先生古稀記念　ことばの論文集』明治書院 pp.233-248
佐伯　哲夫（一九八一・一二）「副詞『随分』における用法の変遷」『国文学』第五十七号 pp.36-42（関西大学）
丹保　健一（一九八一・一二）「程度副詞の諸相―『ほぼ』『やや』『少し』を中心に―」『国語学研究』第二十一号 pp.11-19（東北大学）
原田　登美（一九八二・三）「否定との関係による副詞の四分類」『国語学』第百二十八輯 pp.138-122
柴田　武・国広　哲弥・長嶋　善郎・山田　進・浅野百合子（一九八二・五）『ことばの意味　３』平凡社
新藤　一男（一九八三・一）「『あまり』の文法」『山形大学紀要　人文科学』第十巻第二号 pp.33-46
江川喜久子（一九八三・三）「程度副詞の意味・用法の記述―すこし、いささか、わずか、やや―」『ことば』第一号（ことばの会・なごや）
劉　傑（一九八三・八）「日本語の『ただ』『たった』と中国語の『只』」『日本語教育研究論纂』第一号 pp.12-18
渡辺　実　編（一九八三・一〇）『副用語の研究』明治書院
工藤　浩（一九八三・一〇）「程度副詞をめぐって」渡辺実　編（一九八三・一〇）所収 pp.176-198

沖　久雄（一九八三・一〇）「小さな程度を表す副詞のマトリックス」渡辺実　編（一九八三・一〇）所収 pp.199-215
木村　英樹（一九八三・一一）「『こんな』と『この』の文脈照応について」『日本語学』第二巻第十一号 pp.71-83
坂口　頼孝（一九八三・一二）「『すっかり楽しみました』の不自然さ」『別府大学国語国文学』第二十五号
浅野百合子（一九八四・二）「程度副詞の分析―ずいぶん・だいぶ・なかなか・相当・かなり（副詞導入の問題点〈特集〉）」『日本語教育』第五十二号 pp.47-54
寺村　秀夫（一九八四・九）『日本語のシンタクスと意味　Ⅱ』くろしお出版
森山　卓郎（一九八五・六）「程度副詞と動詞句」『京都教育大学国文学会誌』第二十号 pp.60-65
福地　肇（一九八五・四）『談話の構造　新英文法選書10』大修館書店
渡辺　実（一九八六・一）「比較の副詞―『もっと』を中心に―」『学習院大学言語共同研究所紀要』第八号 pp.39-52
渡辺　実（一九八七・一）「比較副詞『よほど』について―副用語の意義・用法の記述の試み（二）―」『上智大学国文学科紀要』第四号 pp.39-52
清水　澤子（一九八七・三）「昭和60年度日本語教授法講座修了論文要旨『初級日本語教科書における程度副詞の一考察』」『日本語と日本語教育』第十五号 pp.79-86（慶応義塾大学）
涌井　澄子（一九八八・二）「程度副詞『とても』の研究―陳述副詞から程度副詞への用法の変化を中心に―」『上越教育大学国語研究』第二号 pp.30-34
中川千枝子（一九八八・三）「現代漢語程度副詞の統語意味論的考察」『京都産業大学論集　外国語と外国文学系列』第十五号
和泉　紀子（一九八八・一二）「鴎外・漱石・芥川の文学語彙―程度副詞すこぶる・大変などの場合―」『愛媛国文研究』第三十八号 pp.48-59
川崎　誠（一九八九・一一、九〇・一）「程度副詞の体言修飾について(1)・(2)」『日語学習与研究』第五十七・五十八輯 pp.28-35,pp.6-11
渡辺　実（一九九〇・一）「程度副詞の体系」『国文学論集』第二十三号 pp.1-16（上智大学）
足立　広子（一九九〇・三）「副詞『全然』の用法について」『南山国文論集』第十四号 pp.37-46
吉田　香（一九九〇・三）「漱石の作品に見る『とても』『どうも』」『昭和学院国語国文』第二十三号 pp.75-82
国立国語研究所（一九九一・三）『副詞の意味と用法』文化庁
若田部　明（一九九一・一一）『全然』の語誌的研究―明治から現代まで―」『解釈』第三十七巻第十一号 pp.24-29
和泉　紀子（一九九二・一）「鴎外・漱石・芥川の文学語彙―程度副詞少し・ちょっと・ややなどの場合―」『愛文』第二十七号 pp.20-28（愛媛大学）

須賀　一好（一九九二・一）「副詞『あまり』の意味する程度評価」『山形大学紀要（人文科学）』第十二巻第三号 pp.33-46

張　麗群（一九九二・二）「程度副詞の体言修飾について」『日本語と日本文学』第十六号 pp.28-38（筑波大学）

王　信（一九九二・三）「肯定部を修飾する『とても』の用法」『湘南文学』第二十六号 pp.94-103（東海大学）

森本　順子（一九九二・三）「副詞的機能とモダリティ―『よく』について―」『京都教育大学紀要　人文・社会』第八十号 pp.71-79

井上　優（一九九二・六）「指示表現を含む副詞成分の一特性―『コ（ソ・ア）ンナニ』を例に―」『都大論究』第二十九号 pp.13-22（東京都立大学）

小林可奈子（一九九二・六）「二つの節を前提とする副詞の意味分析について―『あまり』『よほど』『いったん』を例として―」『都大論究』第二十九号 pp.1-12（東京都立大学）

福間　康子（一九九二・六）「誤用分析に基づく『すっかり』の用法の考察―『すっかり』と『全部』との意味領域について―」『九州大学留学生教育センター紀要』第四号 pp.127-135

赤羽根義章（一九九二・七）「とりたて詞と副詞―『たくさん』『すごく』『ちょっと』『少し』のとりたてについて―」『宇大国文論究』第四号 pp.1-10（宇都宮大学）

王　信（一九九三・三）「『とても』の程度副詞化への展開」『湘南文学』第二十七号 pp.142-151（東海大学）

若田部　明（一九九三・三）「『全然』の語誌的研究2」『多々良鎮男先生傘寿記念論文集』 pp.184-173（多々良鎮男先生傘寿記念論文集刊行会）

須賀　一好（一九九三）「副詞『あまり』の意味する低度評価」『山形大学紀要　人文科学』第十二巻第三号 pp.35-45

播磨　桂子（一九九三・六）「『とても』『全然』などにみられる副詞の用法変遷の一類型」『語文研究』第七十五号 pp.11-22（九州大学）

鈴木　英夫（一九九三・一〇）「新漢語の受け入れについて―『全然』を例として―」『松村明先生喜寿記念　国語研究』 pp.428-449 明治書院

服部　匡（一九九三・一二）「『あまり（あんまり）』について―弱否定および過度を表す用法の分析―」『同志社女子大学学術研究年報』第四十四巻第四号 pp.451-477

須藤　明（一九九四・二）「連用修飾『あまり』についての試論（その一）」『東洋大学大学院紀要　文学研究科』第三十号 pp.313-323

梅林　博人（一九九四・七）「副詞『全然』の呼応について」『解釈と鑑賞』第五十九巻第七号 pp.103-110

飛田　良文・浅田　秀子　編（一九九四・九）『現代副詞用法辞典』東京堂出版

服部　匡（一九九四・一〇）「アマリ～ナイとサホド（ソレホド）～ナイ」『同志社女子大学日本語日本文学』第六号 pp.1-21

張　麗群（一九九四・一二）「否定の『ない』と呼応する程度副詞について」『言語学論叢』第十三号 pp.77-91（筑波大学）
服部　匡（一九九四・一二）「『大して（～ない）』、『大した』について」『同志社女子大学学術研究年報』第四十五巻第四号 pp.1(299)-16(314)
梅林　博人（一九九五・二）「『全然』の用法に関する規範意識について」『人文学報』第二百六十六号 pp.35-53（東京都立大学）
奥村　大志（一九九五・一一）「『もっと』についての考察」『日本語教育』第八十七号 pp.91-102
小矢野哲夫（一九九五・一一）「程度副詞としての『まるで』」『日本語・日本文化研究』第五号 pp.1-14（大阪外国語大学）
中山恵利子（一九九六・一）「程度副詞の分類の試み―その程度・量・基準により―」『阪南論集　人文・自然科学編』第三十一巻第三号
松浦　純子・永尾　章曹（一九九六・一）「『全然』と『全く』について―陳述の副詞についての一考察―」『国語国文論集』第二十六号 pp.1-10（安田女子大学）
増井　典夫（一九九六・二）「否定と呼応する副詞と程度副詞についての覚書」『愛知淑徳大学現代社会学部論集』第一号 pp.1-9
中山恵利子（一九九六・三）「程度副詞はことがら成分か」『阪南論集　人文・自然科学編』第三十一巻第四号 pp.11-25
加藤　久雄（一九九六・三）「程度副詞における反期待成立の構造と体系」『奈良教育大学国文』第三十三号 pp.1-19
渡辺　史央（一九九六・三）「比較性程度副詞『ずっと』『もっと』『さらに』についての覚え書き―」『さわらび』第五号 pp.58-67（神戸市外国語大学）
時　衛国（一九九六・四）「中国語と日本語における程度副詞の対照研究―程度の小ささを表す副詞を中心に（一）―」『日本語研究』第十六号 pp.52-63（東京都立大学）
時　衛国（一九九六・六）「中国語と日本語における程度副詞の対照研究―『很』と〈とても〉―」『都大論究』第三十三号 pp.13-25（東京都立大学）
時　衛国（一九九六・七）「中国語と日本語における程度副詞の対照研究―『十分』『相当』と〈十分（に）〉〈相当（に）〉―」『東アジア地域研究』第三号（東アジア地域研究会）
廣坂　直子（一九九六・一〇）「『あまり』についての一考察」『同志社女子大学日本語日本文学』第八号 pp.48-66
服部　匡（一九九六・一二）「程度副詞と比較基準―『多少』、『少し』を中心に―」『同志社女子大学学術研究年報』第四十七巻第四号 pp.269-284(1-16)
林　奈緒子（一九九六・一二）「意味素性による程度副詞の記述」『筑波応用言語学研究』第三号 pp.13-26（筑波大学文芸・言語研究科）
梅林　博人（一九九七・三）「肯定表現を伴う『全然』の異同について」『人文学報』第二百八十二号 pp.35-53（東京都立大学）
佐野由紀子（一九九七・三）「程度副詞の名詞修飾について」『大阪大

学日本学報』第十六号 pp.121-133
渡辺　史央（一九九七・三）「『もっとずっとZ』をめぐって―『比較性』としての意味機能の観点から―」『日本語・日本文化』第二十三号 pp.67-84（大阪外国語大学）
時　衛国（一九九七・四）「中国語と日本語における程度副詞の対照研究―『极』『非常』と〈極めて〉〈非常に〉―」『日本語研究』第十七号 pp.28-42（東京都立大学）
時　衛国（一九九七・七）「中国語と日本語における程度副詞の対照研究」『東アジア地域研究』第四号（東アジア地域研究会）
林　奈緒子（一九九七・八）「程度副詞と命令のモダリティ」『日本語と日本文学』第二十五号 pp.1-10（筑波大学）
許　仁順（一九九七・九）「確信を表す程度副詞の数量化に関する考察―韓国語と日本語の比較分析―」『日本教育工学雑誌』第二十一巻第二号（日本教育工学会）
加藤　久雄（一九九七・一〇）「程度副詞の反期待について」川端善明・仁田　義雄編『日本語文法　体系と方法』pp.79-95（ひつじ書房）
大島　潤子（一九九八・二）「日本語と中国語の比較を表す程度副詞をめぐって―『もっと』と〝更〟―」『国文目白』第三十七号 pp.24-32（日本女子大学）
渡辺　史央（一九九八・二）「日本語の副詞『ずいぶん』の一考察―モダリティ形式と人称との関連から―」『神戸大学留学生センター紀要』第五号 pp.63-78
梅木　陽子（一九九八・三）「日本語の程度副詞について―『かなり』、『結構』を中心に―」『南山日本語教育』第五号 pp.165-188
呉　玹定（一九九八・三）「程度を表わす連体修飾成分について―程度評価づけの修飾成分と数量的程度の修飾成分―」『現代日本語研究』第五号 pp.91-99（大阪大学）
佐野由紀子（一九九八・三）「程度限定における『主観性』について」『現代日本語研究』第五号 pp.111-120（大阪大学）
時　衛国（一九九八・三）「中国語と日本語における程度副詞の対照研究―『最』『頂』と〈最も〉〈一番〉―」『語学教育研究論叢』第十五号 pp.121-139（大東文化大学）
田中　敏生（一九九八・三）「極限への接近―程度副詞『ごく』の意味特性をめぐって―」『四国大学紀要　Ser.A　人文・社会科学編』第九号
佐野由紀子（一九九八・四）「程度副詞と主体変化動詞との共起」『日本語科学』第三号 pp.7-22
時　衛国（一九九八・四）「中国語と日本語における程度副詞の対照研究―程度の小ささを表す副詞を中心に（二）―」『日本語研究』第十八号 pp.12-27（東京都立大学）
佐野由紀子（一九九八・一二）「比較に関わる程度副詞について」『国語学』第百九十五輯 pp.1(112)-14(99)
加波　尚子（一九九九・三）「『もっと』の成立について―『もうちょっと』との関連において―」『日本文芸研究』第五十巻第

四号　pp.19-34（関西学院大学）
坂口　昌子（一九九九・三）「否定形式との関係からみた程度副詞の体系」『国語語彙史の研究』第十八号　pp.1-20
佐野由紀子（一九九九・三）「程度副詞との共起関係による状態性述語の分類」『現代日本語研究』第六号　pp.32-50（大阪大学）
川端　元子（一九九九・七）「広義程度副詞の程度修飾用法―『本当に』『実に』を例に―」『日本語教育』第百一号　pp.51-60
時　衛国（一九九九・八）「中国語と日本語における程度副詞の対照研究―『比較』と〈比較的〉―」『富山大学人文学部紀要』第三十一号 pp.239-261
井本　亮（一九九九・一〇）「『ほど』構文の解釈と主文の有界性について―述語動詞句の動詞分類を中心に―」『筑波日本語研究』第四号
時　衛国（一九九九・一〇）「中国語と日本語における程度副詞の対照研究―『更』『還』と〈もっと〉〈さらに〉―」『コミュニケーション科学』第十号 pp.3-26（東京経済大学）
中山　郁雄（一九九九・一一）「近代小説言説中の『全然』の用法（第一回）―要旨・先行研究他―」『解釈学』第二十七号 pp.24-33
大槻美智子（一九九九・一二）「『よろしい（よい）』と『結構』―評価の質と待遇性―」『国語国文論藻　井手至古稀記念論文集』 pp.18-40 和泉書院
葛　金龍（一九九九・一二）「日中同形漢語副詞『全然』についての比較研究」『愛媛国文と教育』第三十二号 pp.22-28
林　奈緒子（一九九九・一二）「指示機能をもつ程度副詞に見られる制約について―『こんなに』『あんなに』『そんなに』を例に―」『筑波大学言語学論叢』第十八号 pp.25-38
劉　亜飈（一九九九・一二）「『ちょっと』についての一考察」『文学史研究』第四十号 pp.32-39（大阪市立大学）
播磨　桂子（二〇〇〇・一）「副詞『随分』などについて」『日本文学研究』第三十五号 pp.93-105（梅光女学院大学）
東瀬戸正人（二〇〇〇・一二）「『程度副詞』における程度性の変遷について―『あまり』と『あまた』を中心に―」『別府大学国語国文学』第四十二号 pp.162-178
梅林　博人（二〇〇〇・三）「流行語批判とその背景―『全然』の場合について―」『相模国文』第二十七号 pp.57-70
中川　祐治（二〇〇〇・三）「相当度を示す程度副詞『さながら』の変遷―程度副詞と陳述副詞の連続性の視点から―」『広島大学教育学部紀要　第2部』第四十八号 pp.241-248
李　楠（二〇〇〇・三）「中国語副詞〝太〟と日本語副詞『あまり』」『無差』第七号 pp.85-93（京都外国語大学）
川端　元子（二〇〇〇・七）「聞き手への行為要求表現と程度副詞―共起制限理由の再検討―」『名古屋大学国語国文学』第八十六号 pp.78-64
林　奈緒子（二〇〇〇・一二）「比較構文に出現する程度副詞について―『さらに』の分析を中心に―」『筑波応用言語学研究』第七号 pp.1-14（筑波大学）

東瀬戸正人（二〇〇〇・一二）「『程度副詞』における程度性の変遷について―『あまり』と『あまた』をちゅうしんに―」『別府大学国語国文学』第四十二号 pp.162-178
小池　清治（二〇〇一・二）「『全然』再々考」『宇大国語論究』第十二号 pp.1-11
森下　順子（二〇〇一・三）「『とても』の否定用法」『同志社女子大学大学院文学部研究科紀要』第一号 pp.57-77
渡辺　史央（二〇〇一・三）「『ずいぶん』の様相―事態認識のレベルをめぐって―」『神戸大学留学生センター紀要』第七号 pp.53-69
渡辺　実（二〇〇一・四）『さすが！日本語』ちくま新書
木下　恭子（二〇〇一・六）「比較の副詞『もっと』における主観性」『国語学』第五十二集第二号 pp.16-29
漆原　広樹（二〇〇二・一）「『少しも』と『ちっとも』について」『国語論究　現代の位相研究』第九集　明治書院 pp.272-291
許　仁順（二〇〇二・三）「中・下位の確信を表す程度副詞に関する考察―日・韓両言語の対象分析を中心に―」『日本語・日本文化研究』第九号 pp.1-21（京都外国語大学）
川端　元子（二〇〇二・七）「程度副詞相当句（節）『Pほど』について」『日本語教育』第百十四号 pp.40-49
侯　月琴（二〇〇二・八）「『ずっと』『さらに』『もっと』―比較性程度副詞について―」『日本言語文化研究』第四号 pp.1-14
川端　元子（二〇〇二・一〇）「比較構文に出現する程度副詞―スケールの相違という観点から―」『日本語科学』第十二号 pp.29-47
葛　金龍（二〇〇二・一二）「『全然』の意味機能について―俗語的用法を中心に―」『愛媛国文と教育』第三十五号 pp.11-24
飯間　浩明（二〇〇三・三）「程度副詞『いと』はなぜしきりに用いられるか―『源氏物語』『枕草子』を対象に―」『国語学研究と資料』第二十六号 pp.1-12（早稲田大学）
時　衛国（二〇〇三・三）「中国語と日本語の程度表現形式の様相について」『愛知教育大学研究報告　人文・社会』第五十二号 pp.133-140
趙　宏（二〇〇三・三）「明治二十年代の速記資料における程度副詞の文体的特徴をめぐって」『学芸国語国文学』第三十五号 pp.1-10
三宅　節子（二〇〇三・三）「程度小を表わす副詞の研究―『すこし／ちょっと』を対象に―」『日本語・日本文化』第二十九号 pp.115-136（大阪外国語大学）
中尾比早子（二〇〇三・五）「明治・大正期における程度副詞『非常に』について」『言語科学論集』pp.127-138（名古屋・ことばのつどい）
服部　匡（二〇〇三・六）「小量性と否定―『小さく』と動詞の共起例の調査から―」『同志社女子大学日本語日本文学』第十五号 pp.39-56
岡本佐智子・斎藤シゲミ（二〇〇四・三）「日本語副詞『ちょっと』

における多義性と機能」『北海道文教大学論集』第五号 pp.65-76

葛　金龍（二〇〇四・三）「日中程度副詞『あまり』と〝太〟の対照研究」『国際文化学』第十号 pp.73-86（神戸大学）

笹本　明子（二〇〇四・三）「『程度副詞＋ノ＋N』における程度副詞の意味構造」『奈良教育大学国文』第二十七号 pp.119-101

萩原　孝恵（二〇〇四・三）「『よく』の用法調査とその分析―〈頻度〉と〈程度〉を中心に―」『昭和女子大学大学院日本文学紀要』第十一号 pp.21-30

服部　匡（二〇〇四・三）「小さな量を表わす表現の意味的性質について」『言語研究』第百二十五号 pp.83-108

森下　訓子（二〇〇四・三）「程度副詞『とても』の肯定用法―『表出』について―」『同志社女子大学大学院文学研究科紀要』第四号 pp.53-67

渡辺　史央（二〇〇四・三）「時間の推移に伴う属性変化における程度限定―三つのタイプの程度副詞について―」『ニダバ（NIDABA）』第三十三号 pp.11-20（西日本言語学会）

佐野由紀子（二〇〇四・四）「『もっと』の否定的用法について」『日本語科学』第十五号 pp.5-21（国立国語研究所）

宮城　信（二〇〇四・八）「『少しずつ』構文と進展の意味―『動作の進展』と『変化の進展』―」『日本語と日本文学』第三十九号 pp.32-48（筑波大学）

井上　博嗣（二〇〇五・一、〇六・一、〇六・一〇、〇七・三）「『暗夜行路』にみられる程度副詞の語彙とその意味組織と各語の用法―（1）比較的程度のもの・（2・3・4）そのさまの程度を示すもの―」『人間文化研究』第十四、十六、十八、十九号（京都学園大学）pp.132-99 pp.166-140 pp.264-217

藤原　浩史（二〇〇五・二）「副詞『ちょっと』の意味機能」『国文目白』第四十四号（日本女子大学）

今西真理子（二〇〇五・三）「『ちっとも』の使い方―『全然』と比較して―」『外国語教育―理論と実践―』第三十一号 pp.17-25（天理大学）

薄井　良子（二〇〇五・三）「反対意見表明における『ちょっと』の役割について」『国際文化学研究』第十二号 pp.1-18（神戸大学）

金　賢珍（二〇〇五・三）「日韓両言語の程度副詞と共起する名詞について―『程度大』を表わす語を中心に―」『多元文化』第五号 pp.171-185（名古屋大学）

中尾比早子（二〇〇五・三）「副詞『とても』について―陳述副詞から程度副詞への変遷―」『雑誌太陽による確立期現代語の研究』pp.213-226（博文館新社）

中田　一志・有田　節子（二〇〇五・三）「発達段階における対人的表現『ちょっと』についての覚え書き」『大阪樟蔭大学日本語研究センター報告』第十三号 pp.17-33

島田　泰子（二〇〇五・六）「連用における例示と程度―コンナニ類

の程度副詞化―」『日本近代語研究』第四号 pp.157-169 ひつじ書房
葛　金龍（二〇〇五・一二）「『全然』の俗語的用法の発生」『愛媛国文と教育』第三十八号 pp.8-22
庄　鳳英・成　同社・朱　新健（二〇〇六・二）「程度副詞と形容詞・動詞との呼応関係についての研究―中国語の『越来越～』と日本語の『ますます』を中心に―」『愛知学院大学教養部紀要』第五十三巻第三号
片山きよみ・舛井　雅子（二〇〇六・三）「初・中級レベルの日本語教育で教える程度副詞―とても・大変・非常に・すごく・ひどく・本当に―」『熊本大学留学生センター紀要』第九号 pp.25-53
笹本　明子（二〇〇六・三）「『ちょっと』の発達機能について―行為要求に表れる『ちょっと』を中心に―」『同志社女子大学大学院研究科紀要』第六号 pp.115-136
中田　一志・有田　節子（二〇〇六・三）「社会的領域における会話の参加者の負担軽減について―『ちょっと』の分析を通して―」『大阪樟蔭大学日本語研究センター報告』第十四号 pp.17-33
小泉　嘉子（二〇〇六・六）「点推定法・区間推定法による心的動詞の確信度判断の測定に関する研究―程度副詞『少し』『かなり』に焦点をあてて―」『東北大学大学院教育学研究科研究年報』第五十四巻第二号 pp.343-353
山口　和代（二〇〇六・六）「留学生と日本人学生の日本語表現―『ちょっと』『けど』を中心に―」『アカデミア　人文・社会』第八十三号（南山大学）
深味　彩（二〇〇六・一〇）「研究ノート　『―い』の形で程度副詞的に使われる形容詞」『東京女子大学言語文化研究』第十五号 pp.123-127
佐野由紀子（二〇〇六・一二）「動きに関わる量について―量的程度副詞と動詞との共起関係から―」『高知大国文』第三十七号 pp.88-79
朴　美淑（二〇〇七・三）「程度副詞『ちょっと』について」『日本語学研究』第十八号 pp.131-146（韓國日本語學會）
服部　匡（二〇〇七・三）「因子分析を用いた程度副詞と述語等の共起関係分析の試み―新聞コーパスのデータから―」『総合文化研究所紀要』第二十四号 pp.98-109（同志社女子大学）
井島　正博（二〇〇八・三）「クライ・ホド・ナド・ナンカ・ナンテの機能と構造」『日本語学論集』第四号 pp.42-97（東京大学）
趙　宏（二〇〇八・八）「中世語の会話文における程度副詞の使用状況をめぐって―『高い程度を表わす』副詞を中心にして―」『明治大学日本文学』第三十四号 pp.65-50
佐野由紀子（二〇〇八・一二）「『程度差』『量差』の位置づけ―程度副詞の体系についての一考察―」『高知大国文』第三十九

号 pp.75-64
鳴海　伸一（二〇〇九・三）「『相当』の意味変化と程度副詞化」『国語学研究』第四十八号 pp.133-120（東北大学）
趙　宏・祁　福鼎（二〇一〇・二）「近代語の会話文における程度副詞の使用状況をめぐって―『高い程度を表わす』副詞を中心にして―」『明治大学日本文学』第三十五号 pp.60-49
渡辺　史央（二〇一〇・三）「論理的文章における程度副詞について―文体差と意味的用法の観点から比較を表す程度副詞を中心に―」『ニダバ（NIDABA）』第三十九号 pp.106-115（西日本言語学会）
田和真紀子（二〇一一・三）「程度副詞の評価性をめぐって」『宇都宮大学教育学部紀要』第六十一巻第一号 pp.25-36
趙　宏（二〇一一・三）「近代日本語の程度副詞へのアプローチ―その使用分布と文法機能に焦点を当てて―」『東アジア日本語教育・日本文化研究』第十四号 pp.247-263（東アジア日本語教育・日本文化研究学会）
鳴海　伸一（二〇一二・一）「程度的意味・評価的意味の発生―漢語『随分』の受容と変容を例として―」『日本語の研究』第八巻第一号 pp.65-45
田和真紀子（二〇一二・三）「評価的な程度副詞の成立と展開」『近代語研究』第十六集 pp.87-100 武蔵野書院
藤巻　一真（二〇一二・三）「動作完了の『あげる』と程度副詞の『完全に』に関するノート」『Scientific Approaches to Language』第十一号 pp.1-15（神田外語大学）
北原　博雄（二〇一三・三）「量修飾の可能性と、被修飾句のスケール構造の違いに基づいた、現代日本語の程度副詞の分類」『国語学研究』第五十二集 pp.29-43（東北大学）
鳴海　伸一（二〇一三・一一）「副詞における程度的意味発生の過程の類型」『国立国語研究所論集』第六号 pp.93-110
中尾比早子（二〇一四・三）「程度副詞『すごい』の使用実態」『Nagoya Linguistics』第八号 pp.85-98（名古屋言語研究）
市村　太郎（二〇一四・四）「副詞『ほんに』をめぐって―『ほん』とその周辺―」『日本語の研究』第十巻第二号 pp.1-16
江　雯薫（二〇一四・一二）「頻度副詞に関する一考察―程度副詞との関連を中心に―」『比較文化研究』第百十四号 pp.37-45（日本比較文化学会）
小島　聡子（二〇一五・二）「宮沢賢治の童話における程度副詞―程度の大きさを表す表現について―」『近代語研究―古田東朔教授追悼論文集―』第十八集 pp.207-226 武蔵野書院
趙　宏・張　建偉（二〇一五・三）「現代日本語の程度副詞の文体をめぐって」『東アジア日本語教育・日本文化研究』第十八号 pp.387-400
陳　建明（二〇一五・三）「日本語と中国語の比較に関わる程度副詞の分類について」『人文学論集』第三十三号 pp.203-211（大阪府立大学）

深見　兼孝（二〇一五・三）「『とても』が韓国語で程度副詞に翻訳されないとき」『広島大学国際センター紀要』第五号　pp.51-60
市村　太郎（二〇一五・四）「雑誌『太陽』『明六雑誌』における程度副詞類の使用状況と文体的傾向」『日本語の研究』第十一巻第二号　pp.33-49
時　衛国（二〇一五・五）「程度表現の対照研究―命令・依頼のモダリティ表現―」『日中言語対照研究論集』　pp.22-40　白帝社
時　衛国（二〇一五・六）「程度表現の対照研究―勧誘のモダリティ表現―」『都大論究』第五十二号　pp.1-15
時　衛国（二〇一五・一〇）「程度表現の対照研究―願望のモダリティ―」『日本語と中国語のモダリティ』　pp.40-63　白帝社

（いじま　まさひろ　大学院人文社会系研究科　教授）